

水田農業ビジョン策定のための基本的視点

○ビジョン策定の基本課題

- ・米も商品、売れる米作りを。
- ・大きな農家と小さな農家のお互いの特徴を活かした「大小相補」を。
- ・米だけではなく全体の販売戦略を。
その際女性、お年寄り、新規参入者の力を活かして。
- ・お客の求めるものを作りへの誘導。安全・安心な農産物の安定供給を。
- ・皆の話し合いで「絵に描いたもち」ではないビジョンの策定を。

○10項目のビジョン策定の基本視点

1. 誰が

「人多地少」から「人少地多」、「イエ」（農家）から「ヒト」（個）の時代。それぞれの「ヒト」を活かす容器（法人）を集落（営農）で。あと継ぎ確保と外からの有能な人材確保のための容器（法人）づくり。

2. 誰の（どの）土地で

「人」「水」「土」などの情報を載せた地図づくりと、地図を見ながら計画づくり。計画を作る範囲（学校区、大字、小字、基礎集落）は地域の将来を考えながら。農地は「先祖からの譲り受けた」から「子孫からの預かりもの」への発想。

3. 何を

お客のニーズを徹底的に調べ作物やワセ・ナカテ・オクテのうまい組み合わせ。大都会だけでなく地元のお客のニーズ、食文化や食育も考えた作目選び。「適地適作」から生産者のことを考えた「適地適策」、さらに生産者の英知を活かした「適智適策」へ。

4. どれだけ

消費、需要の予測に基づき「いかに売り抜くか」も考え自己責任で。米は、国の作る基本指針（需給見通し、備蓄量等）を見て、農業者団体や農家自らが生産調整方針を。食品産業や外食産業、スーパー・コンビニ等の小売産業等ニーズも考え、独自のブランドでどれだけ作れるか。

5 . どのような品質のものを

4つの「安」。安全、安心、安定供給、安価。
生産履歴（トレーサビリティ）を証明できるシステムを。
高級品と普及品の二極化傾向にあわせ。また健康志向等にあわせた品質を。

6 . どのような技術体系で

人を活かし地域の特性にあった技術体系。
「伝統技術」を活かし新しい「先端技術」への挑戦。
6次産業化（ $1 \times 2 \times 3 = 6$ ）による付加価値と安全管理体系。

7 . いつ作り

農産物加工（6次産業化）考えて作る時期、売る時期を。
輸入生鮮農産物との競合も考えて。
種子を下ろす前に、売り先、売り方、売り場、売り値などを考え実行。

8 . どのような方向でいかに売るか

食と農の距離を地域住民のニーズを踏まえて縮め、農家の手取りを最大にの視点で。
新設される米穀価格形成センターに対応した米の売り方を考える。
リスク最小原則としての「3・3・3・1の原則」。3（直売、直販、地産地消等）、
3（契約販売、契約生産）、3（中央・地方卸売市場出荷）、1（先行試作等）。

9 . 産地づくり推進交付金等をいかに活かすか

地域農業の再編と改革のため、将来の望ましい姿の実現のための有効な手段として。
平等原則から公平原則へ。
ボトムアップ農政（地域提案型創造的農政）への転換、農政改革の起爆剤として。

10 . 推進体制、とりわけJAの改革をいかに進めるか

市町村、農業委員会、JAを含め地域の総力を。
JAのマーケティング機能、コンサルティング機能、マネージメント機能の充実をJA改革で。

「水田農業ビジョンの策定に英知の結集を」
東京大学名誉教授 今村 奈良臣
「自然と人間を結ぶ 11月号」を基に作成